

泉鏡花「年譜」補訂 (十四)

吉田 昌 志

本稿は、先年刊行した岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二（平成十八年一月二十日）収録の泉鏡花「年譜」の補訂で、本誌七九五号（平成十九年一月一日）掲載の「補訂（一）」、七九七号（平成十九年三月一日）掲載の「補訂（二）」、八一九号（平成二十一年一月一日）掲載の「補訂（三）」、八二一号（平成二十一年三月一日）掲載の「補訂（四）」、八二六号（平成二十一年八月一日）掲載の「補訂（五）」、八四三号（平成二十三年一月一日）掲載の「補訂（六）」、八四五号（平成二十三年三月一日）掲載の「補訂（七）」、八五〇号（平成二十三年八月一日）掲載の「補訂（八）」、八五五号（平成二十四年一月一日）掲載の「補訂（九）」、八五七号（平成二十四年三月一日）掲載の「補訂（十）」、八六二号（平成二十四年八月一日）掲載の「補訂（十一）」、八六七号（平成二十五年一月一日）掲載の「補訂（十二）」、八六九号（平成二十五年三月一日）掲載の「補訂（十三）」に続くものである。

内容は、「誤記・誤植の訂正」、「本文の訂正・追加」、「典拠の訂正・追加」、「新たな項目」、の四部に分かち、書式を次の通りとする。

一、表記は、原則として右「年譜」に準じた。

一、「年譜」本文の後に、【典拠】として、文献の原文、未公開資料の翻字等を示し、典拠が複数の場合は番号を付して併記した。【注記】

の項には、内容の解説、考証等を記した。

一、引用文の仮名づかいは、原文のままとし、字体は概ね現行の印刷文字に改め、読解に必要なルビを残した。傍点、圏点は概ね原文のままとした。

一、引用文の中略部分は、総て「（…）」で示し、前略、後略はいちいち断わらなかった。引用文の誤記・誤植は、「」内に補正した。

一、典拠文献が複数項目に重出する場合も、そのつど項目ごとに示して、書誌的事項の記載を省かなかった。

一、「本文の訂正・追加」では、訂正部分、新たな追加部分に傍線を付して区別した。

一、文中の敬称は、原則として省略した。

一、必要に応じて、「＊」のあとに注記事項を補った。

【誤記・誤植の訂正】 ＊今回は無し。

【典拠の訂正・追加】 ＊今回は無し。

「本文の訂正・追加」

明治四十二年（一九〇九） 己酉 三十七歳

六月 二十四日、第五回鏡花会が上野韻松亭で開かれた（幹事は堀尾成章、会費七十五銭）。前日二十三日付「読売新聞」（五面）の「よみうり抄」に会の予告が載った。二十六日付「東京朝日新聞」（五面）には会の模様が報じられ、参会者二十名、閉会は午後十時すぎであったという。

【典拠】「妖怪会議」（東京朝日新聞）明治四十二年六月二十六日付・五面

▽雨の夜鏡花会の事

物怖した様に二十人が二十人他の顔ばかり眺めて誰が何を言ひ出すかと息を凝らして身動きもしない

簷を壓する若葉の茂みを冥濛と包んだ霧雨が凝つて葉末の珠となると頭上に撞き出す鐘の響で音なく庭に散る夕べ妖怪談には詭らへ向の肌触りの悪い風がヌウと座敷を吹通すと腥さいと眉を顰めて誰やらが先口を切る、フロックの医学士は泰然たるもので「医科大学の解剖教室には寝台が十一個あります夫に死骸が満員になつた儘一夜を過すと翌朝屹度一つは台から落ちて居ます」自ら解剖参観通を以て任ずる白面の法科生は「柳橋の美人が死骸となつて運ばれた、其神々しさ艶やかさ執刀の若手連何れも恍として手が痺えた、某先生笑つて一刀に鼻を削いだので辛つと一同平然刀を閃めかしたといふ事です」と承ける、尼寺の仏壇の蜘蛛の巣を説き又早雲寺の猫が一旦死んで足の裏に経文を書かれた為蘇生つて更に十数年の寿を保つ事を語つたのは文壇に隠れない佃の姉御で、濤龍館の狸を談じ比丘尼橋逢引橋の怪を論じたのが新橋のつうちちゃん、金沢の地が怪異伝説に富んで居る事は主賓鏡花氏が明細に説

明する、澤の鶴の一合瓶を宛がはれて少し元気を恢復した頃は狐狸河童を論じて妖怪と幽霊の区別に及ぶのもあれば頻りに臨終感応の実例を列挙するものもある、夫から夫と話は盡きないのに座は何時しか狭まつて膝を付合せ暗がり、に気を置くに至つて乃ち会を閉ぢたのは夏の夜の更易い十時過であつた、磯部温泉の妖婦、達磨峠の石地藏、血附の幟、其他は長篇に互るのでお預りとする（廿四日夜上野韻松亭にて雪生）

【注記】

「年譜」では寺木定芳『人、泉鏡花』（武蔵書房、昭和十七年九月五日）に拠り、さらに「補訂（六）」で「読売新聞」の報を補った。「読売新聞」に「午後一時より」とあるのに従つて開会時刻も追加したが、今回の「東京朝日新聞」に、閉会は午後「十時過」であつたと出ており、内容が怪談会であるから、開会時刻の記載を削った。

この報によると、参会者は二十名、妖怪談をした者のうち、「法科生」は幹事の堀尾成章、「新橋のつうちちゃん」は新橋の芸妓小石（本名柴田つる）、「佃の姉御」は長谷川時雨のことではないかと思われる。

またこれを報じた筆者の「雪生」は、逗子時代以来親交のあった坂元雪鳥（旧姓白仁、本名三郎）であろう。雪鳥が二葉亭四迷を伴つて、逗子滞在中の鏡花を訪れたこと（明治四十一年の春カ）は、「補訂（九）」に記した。

大正三年（一九一四） 甲寅 四十二歳

七月 十日より二十五日まで開催の画博堂（京橋区東仲通一番地の美術店）における「妖怪画展覧会」の告條を書いた。この展覧会の内容は十八日付「時事新報」（五面）に報じられたほか、二十五日発行の「絵画叢誌」（第三二四号）に紹介された。

十二日、同じく画博堂主催の「怪談会」（於同店四階）に出席した。その他の出席者は、岩村透、黒田清輝、岡田三郎助・八千代、長谷川時雨、柳川春葉、市川左団次、松本幸四郎、河合武雄、喜多村緑郎、吉井勇、長田秀雄・幹彦、谷崎潤一郎、岡本綺堂、坂本紅蓮洞、松山省三、鈴木鼓村ら、六十余名に及んだ。この会の模様は、十四日付「国民新聞」〔五面〕に「物凄い怪談会」と題して報じられ、また二十日付「読売新聞」〔五面〕の「文芸画報」欄に「鏡花氏等の発起」として写真入で報じられた。

【典拠1】「妖怪画展覧会」（時事新報）大正三年七月十八日付・五面

科学の発達が幼稚で天地に怪異が満ちて居た時代には、妖怪変化も一種の真面目なる画題であつたに相違なく、最も写生の方面から説明を試み「た」応募の作品などは、流石に一流の見解があつて面白いが、後代の晝斎芳年あたりになると、些かバロツクの傾きがあつて故意に凄気を出さんとした所に反つて反感を伴ふ。大正聖代の今日と云ふもチト大袈裟であるが、未だ此の糟粕を嘗めて下手な写生の土台を基礎として刻迷（マヤ）に描いて、ゐる画家の沢山あるのは滑稽である。其所へゆくと清方の「河童太郎」其の他柳塙の「夕顔」「海の霊」「秋雨」等のウ井「キ」ツトから出来たもの、未醒の「化仏」柏亭の「雪女」等の漫画趣味、耕花の「女化ケ原」省三の「山姥」権八郎の「失題」土佐絵式の装飾味から描いたものには捨て難い面白味がある。尚蕉園女の描いたお化は素的に美しく恁麼お化なら毎晩出て貰つた方がよいと云ふ評判である京橋東仲通柳町画博堂二十五日迄（黒眼鏡）

【典拠2】「物凄い怪談会 生々しい啞の顔」（国民新聞）大正三年七月十四日付・五面

湿つぽくつて冷々する十二日の夕暮から京橋柳町画博堂に妖怪画の展覧会が

開かれた薄暗い入口に会場と記した白旗と白張提灯を掲げ堂主の弟妹が白い浴衣で受付に控へた光景が最初から臆病者の膽を冷させる階上には未醒、柳塙、省三氏等の描いたお化画の陳列、人魂の形をした凄（こわ）い指示（し）しに導かれて螺旋（きざし）の階段をヒヨロ／＼と上ると正面には燈籠の火影が朦朧（ぼんやり）、壁間には英朋画伯の「襖越」蕉園女史の「牡丹燈籠」なんぞ恐ろしい絵が凄愴な色を浮べて居る宵の頃から泉鏡花、鈴木鼓村、喜多村緑郎君などの顔が見えて怪談が始まる紅蓮洞氏昔噺が口切りで鈴木鼓村君は大阪の或町で亭主に殺された女の化物が探偵の家に頭はれ犯人が捕縛された事実談や檜尾「鹿塩」君の化物の出る家に棲（す）だ実験談があり伊井の門下石川幸三郎は十年程前田舎廻りをして茨城県真壁に興行中土地の達磨茶屋の十六になる啞娘と好い仲になり其れを振り捨て、遁（に）げ去り前橋に乗込んで町廻りになると彼の女は利根川辺に死体となつて引揚げられ其夜から自分は劇（じ）しい熱病に罹り楽屋の一隅に呻吟（すす）中漏（も）る雨滴（あまだれ）が啞の女顔に見えて戦慄した色懺悔を試み夫れから燈火を滅して暗中で喜多村の大阪に於ける怪談があり鏡花君が其後に現はれ四隣（あたり）は寂として更け行く儘に益々怖ろしい話が始められた（午前一時記）

【注記】

「年譜」では雨田光平編『鼓村襟記』（古賀書店、昭和十九年二月二十五日）に拠り、また「補訂（六）」では「読売新聞」の記事を補ったが、今回さらに二紙の報を追加した。

「時事新報」は展覧会出品作に詳しく、鏑木清方、島崎柳塙、小杉未醒、石井柏亭、山村耕花、松山省三、平岡権八郎、池田蕉園らの名前が挙っているが、清方作「河童太郎」のことは年譜（大塚雄三編『鏑木清方年譜』山田肇監修『鏑木清方画集資料編』ビジョン企画出版社、平成十年八月三十一日）に記載をみない。

「年譜」の典拠とした「絵画叢誌」では、右以外に池田輝方、右田年英、緒崎英

朋、村岡應東、山中古洞、三島蕉窓の名がある。

「時事新報」に名のない鰐崎英朋の画は、松本品子編『妖艶粹美―甦る天才絵師・鰐崎英朋の世界』（国書刊行会、平成二十一年十二月二十五日）に「幽霊」と題して収録されているもの（同書一五頁・カラー図版）ではないかと思われる。キャプションに「大正三年夏／絹本着色・軸／127・5×48・7／小池光雄氏蔵」「右下に「甲寅夏日英朋」とある。「甲寅」は大正三年の意」とあって、年紀が一致するからである。画の題は所蔵者が変わるうちに当初のものが改められる場合がしばしばあるが、「襖越」もこの例に洩れない。

「新たな項目」

明治三十二年（一八九九） 己亥 二十七歳

三月二十九日、さる二月二十四日に逝去した春陽堂主人和田篤太郎（号鷹城^{ようじょう}）安政四年八月二十三日生れ、享年四十三）の追悼会（故人五七日追善、於紅葉館）へ尾崎紅葉、小栗風葉、柳川春葉らとともに出席した。参会者は、巖谷小波、石橋思案、江見水蔭、大橋乙羽、川上眉山、武内桂舟、広津柳浪ら硯友社同人のほか、無慮百十余名に及び、発起人総代福地桜痴の挨拶、紅葉による祭文朗読等があった。

【典拠1】 死亡広告（「読売新聞」明治三十二年二月二十六日付・六面）

春陽堂主和田篤太郎

儀永々病氣之處養生不相叶今二十四日午後第四時死去致候間此段生前辱知諸君に御報知申上候也

追而送葬之儀者来る二十六日午後第

一時日本橋区通四丁目自宅出棺浅草

区吉野町大秀寺へ仏葬致候事

尚本人遺言も有之候に付造花放鳥等

御恵贈之儀者堅く御断申上候也

妻 和田梅子

明治卅二年
二月廿四日

親戚 尾崎宗隆

同 小林直造

【典拠2】 「時報」（「新小説」四年五巻、明治三十二年四月六日）

▲春陽堂主 和田鷹城君の事を記するは、我時報の憚らずんばある可らざる所、然も尚敢て一言せざる可らず、氏や年壮にして東都に出で、憤鼻^{とくび}一筋

赤髯々たる身を以て大手を振り、白眼江湖を睥睨して、終に今日の位置をなせるものなり、人はいふ春陽堂の店頭小にして名に称はずと、然り僅かに三間半の間口、之を大厦の巍然たるに比すべくもあらねど、其当代の文学に預りて力ある蓋し少小にはあらざるべし、君病む事五閏年終に本年二月廿四日を以て易簀す、同人相図り、追悼会を芝紅葉館に開きて聊か君の霊を慰めむとす、会するもの皆当代の文豪画伯及び知名の士にして、無慮百十有余名、席上発起人総代として桜痴居士の挨拶、紅葉山人の祭文朗読等あり、各自香を拈^{ひね}つて靈前に手向け、終つて宴を開く、酒盞廻る事静かにして、一座皆肅々、往事^{まじ}を追懷して転た闇然たり、此日は鷹城君の五七日逮夜に該当し、実に明治三十二年三月二十九日なりき。

【典拠3】 巖谷小波日記（小波日記研究会「巖谷小波日記 翻刻と注釈―明治三十二年―」

「白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集」Ⅷ、平成十七年三月）*刊行日記載なし。（「」は引用者補。

〔明治三十二年〕三月二十九日（水）晴

九時出勤 十一時帰る

午後一時紅葉館行 和田篤太郎氏追善会

々するもの百余名 別席大橋角田尾崎武内

ら 後又日本橋菊住に赴く 書肆連中

同席萬作懷旧談あり

【典拠4】 和田篤太郎追悼会写真（「生誕一四〇年 泉鏡花展―ものがたりの水脈―」図

録、県立神奈川近代文学館、会期平成二十五年十月五日―十一月二十四日）＊同書

一六頁。個人蔵。

【注記】

当日の鏡花の出席は、引用を省いた典拠4の写真によって確かめることができる。

最前列左から五番目に紅葉、さらに六人置いて春葉、鏡花、風葉の順に坐しているこの写真には、二列目中央の篤太郎夫人うめ（二代主人。明治三十九年十二月二十一日歿、享年五十三）を中心に、全部で九十五名が写っており、小波日記をもとに硯友社関係で同定できる人物の名を記した。その他に、内田魯庵、坪内逍遙、高田早苗らも確認できるが、傍証を欠くため本文への記載は控えた。

典拠2に、「君病む事五閏年」とあるごとく、篤太郎は日清戦争の前後から病臥していたため、出版の実質に関わることは少なくなっていたが、追悼会の百名を越える参集は春陽堂創業者の威徳であらう。

鏡花はこの年、春陽堂から二月に『錦帯記』、十一月に『湯島詣』をそれぞれ書下して刊行、翌三十三年一月には小栗風葉とともに正社員となって「新小説」編輯局に入り、主幹後藤宙外のもとで働くようになった。

篠田鉦造「明治文学書肆春陽堂」（『明治開化綺談』明正堂、昭和十八年三月十日）には、紅葉と春陽堂との関係を記して「紅葉先生は御自分の問題で見たことはない。屹度門人のため、ことに泉鏡花さんのため、推挙にこれ勉め、情誼の厚い先

生だとは、誰しも敬服させられてゐました。和田もソレには感心してゐました。」と出ている。春陽堂の古参店員からの聞書だが、鏡花の春陽堂入りは自らの示した進境はもとよりのこと、紅葉の推輓もまた与っていたのである。

なお鏡花は篤太郎の後を継いだうめ夫人の追悼会（明治四十年四月十五日、於木挽町萬安楼。「年譜」で和田静子と誤記したのを「補訂（六）」で訂正）にも、返子から上京し出席している。

大正八年（一九一九） 己未 四十七歳

八月 十日、木下利玄は第二歌集『紅玉』を鏡花に寄贈するため、版元の玄文社に赴き署名した。他の寄贈先は、佐佐木信綱、石樽千亦、窪田空穂、太田水穂、松村英一、島木赤彦、橋田東聲、西村陽吉、前田夕暮、土岐哀果、尾山篤二郎の十一氏であった。

【典拠】 木下利玄「鎌倉日記」（弘文堂書房版『木下利玄全集』下巻、昭和十五年八月五日）＊（「」は引用者補。

〔大正八年〕八月十日 日曜 晴

玄、午前八時四十七分発汽車にて上京、芝公園玄文社に赴き「紅玉」四百部に検印捺す。（六百部は已に本屋に出でたり）又寄贈書十二冊に署名する、寄贈先左の如し。

佐佐木信綱	石樽千亦	窪田空穂
泉鏡花	太田水穂	松村英一
島木赤彦	橋田東聲	西村陽吉
前田夕暮	土岐哀果	尾山篤二郎

「紅玉」は緋塩瀬に黒でルネサンス模様（金のもあり）を捺した立派なものが出来た。

次に赤十字社に利昌「を」見舞ふ、利朗、壽子と会す、「紅玉」一部利昌に贈る。更に児島訪問（千駄ヶ谷八五九）「紅玉」装幀に就て語る、夜、月よし。児島と銀座散歩、千足屋二階にて共に食事す、戸張孤雁氏に逢ふ。

【注記】

『紅玉』出版の経緯は、利玄の「住吉日記」（大正七年分）と「鎌倉日記」（同八年分）が残っていて、精しくたどることができる。

略述すれば、大正七年三月八日に玄文社（雑誌「新演芸」「新家庭」発行元。本社は芝区芝公園九号地ノ二）の長谷川巳之吉（のち第一書房創業者）が来訪、書名を「紅玉」とすることに決し、装丁を児島喜久雄に依頼、同名作のある鏡花の承諾を得ることも確認された。十四日夜、田島金次郎歓迎会で鏡花への許諾斡旋を田島に頼み（年譜「記載ずみ」、八月二十七日から原稿整理にかかって、十月二十四日には師の佐佐木信綱に収録歌の校閲を依頼し、多少の刪正を経て十一月二日に整理を終えた。翌八年三月十九日より校正に入り、七月二十六日には内務省提出の出版届に捺印、玄文社へ送っているが、奥付の発行日は七月三日である。

「武者小路実篤兄に」と献辞のある本書は、処女歌集『銀』（洛陽堂、大正三年五月二十六日）以降、大正六年十二月までの作から選した五二〇首を収める。末尾に「大正八年四月三十日夜 鎌倉大町にて」とある跋文には「紅玉と云ふ名は、泉鏡花氏の短篇集にあるから、氏に御話したところ快諾を得たので気持よくこの名を用ひる事が出来た」との謝辞を記す。鏡花の『紅玉』は、植竹書院より「現代傑作叢書第六編」として大正二年十二月五日発行。表題作のほか「酸漿」「公孫樹下」「柳小島」「月夜」を収めた書。

署名寄贈した鏡花以外の十一氏は、すべて歌人の師友である。献辞を呈した武者小路はじめ「白樺」同人にも当然贈呈したにちがいないが、八月十日の分はそれ以外の人々ということになるだろう。

寄贈以後の利玄の日記を見ると、八月十六日には、窪田、松村、橋田、尾山より返書があり、十一月二十六日には川田順郎（大阪天王寺）で『紅玉』の会」が催されることになったむね記されているが、鏡花の返礼については記載がない。

典拠の文中、利昌（大正十年七月六日歿）、利朗（明治二十三年生、昭和三十三年十二月歿、享年六十九）、壽子（昭和二十二年歿）は利玄の弟妹である。

大正九年（一九二〇） 庚申 四十八歳

七月 十二日、夕刻より向島百花園（喜多野家別荘）で岡田八千代の幹事をする会があったが欠席した。

【典拠】 泉鏡花「私の事」（『時事新報』大正九年七月十六日付・夕刊十面）

打続く蒸暑さ。漫歩して立寄らば、恠る時、色も香も涼しかるべき、清水谷の紫陽花も見に行かず。今日は又夕方より、向嶋百花園なる喜多野家の別荘にて、幹事は岡田八千代さんとて、螢に打水の露と云ふ、優しき会の催しあるさへ、俾？を馳ざる本意なさよ、否、卑怯さよ。私は宿酔のためと言へど、彼処に集まる豪傑連は、心掛の悪い奴、盆前ゆゑと憐むはまだしも意地の悪いのは、蠅を可恐がると嘲るなるべし。豈蠅などを恐れむやと、絵団扇の張肱しながら、蚊遣香をむら／＼と燻して、半減の晩酌に、肴は細隠元豆の玉子綴、たべものゝ其の可愛きこと処女と言ふべし。焉ぞ知らむ、此の処女、節季の勘定に平かならず、藤椅子の古いのに微酔（ほろ酔ひ）のじたくして、偶と田岡嶺雲の数奇伝を読む。渠が其の恋を自叙して、（月見草のやうな女）と、山峡、津山川の夏の月に、露に袂を絞る処、ページを繰して涼気颯爽。（十二日夜）

【注記】

諸紙誌を探索したものの、現在までのところ、この会の名称および開催につい

て詳かにしえない。九九九会の前身のような会の可能性も考えられるが、今後の調査を待ちたい。

会場となった百花園内「喜多野家の別荘」は「補訂(十一)」にも記した通り、前年大正八年七月十九日に怪談会の催されたところであるが、正式な名称を定めがたく、今回は鏡花の表記にしたがった。

文中には不参の理由を「宿酔のため」と記すが、「時事新報」同日の六面には「芝と深川に虎列刺続出す」の報が載っており、芝区西久保と深川区東扇橋にコレラの疑いある者の出たことを伝えている。この夏はコレラの蔓延した年で、「万朝報」(七月九日付・三画)によれば、七日正午から八日正午までの一日で全国に九十二名の新患者を出し、内務省調べで初発以来「疑似二七四、真症七五四、保菌者一一六といふ多数である」と報じられており、兵庫(二六一名)、大阪(二四一名)、福岡(一四三名)で多く発生したのち、漸次東上し、中旬には帝都にも及んできていた。

鏡花の神経質は人のよく知るところ、しばしばゴシップの種となり、三年前のコレラ猖獗のころの「文章倶楽部」(一卷七号、大正五年十一月一日)の「文壇風聞記」には、

今度のコレラで、一番恐慌を感じたのは、文壇第一の神経家泉鏡花氏で、近所にコレラが発生すると、もう一時もじつとしてゐられない。夢中で逃げ出して本郷の方に下宿したが、家人は然うとは知らず、突然の行方不明に、此方が非常の恐慌だったといふ。

と取上げられていたし、自筆年譜(改造社版「現代日本文学全集」十四篇『泉鏡花集』昭和三年九月一日)の大正五年の項に「此の年、初夏のはじめより、あしき病流行したるに恐をなし、門を出でざること、殆ど三月。」とあるのと年次も一致する。「本郷の方に下宿」云々の真偽はさだかではないが、訪問記事の「私の配偶」の

「下」(報知新聞)大正六年二月五日付・四面。『新編泉鏡花集』別巻一収録)にせず夫人の「世間では何ですか主人の事を変つてゝッて云ひますけれど別段そんな事はございません、此間も私ン所では家中にアノ千代紙の蔽おほひがしてあるなんて何かに出てましたが」を受けた鏡花談として「夫れは斯うなんです虎列拉々々ッて云つたッて煙管の吸口を蠅の中へ曝して置くぐらゐる危いこたあ無エッてネ其処でソレ斯んなものを」と煙管の吸口に被せる千代紙のキャップを見せたところ話が袈裟に伝わった、とある。したがって、「私の事」の文中「意地の悪いのは、蠅を可恐がると嘲るなるべし」とは実情に近いものがあるうし、次項、翌月の「中央文学」の彙報記事にも「胃病」が伝えられているので、体調不良をきたしていたことは間違いないだろう。

田岡嶺雲の自伝『数奇伝』は、死の四か月前、明治四十五年五月十五日、玄黄社刊。序文に三宅雪嶺、河東碧梧桐、鏡花、徳田秋聲、登張竹風、堺利彦、藤田劍峰、佐々醒雪、藤井紫影、国府犀東、千葉秀甫、鹿島桜巷、大町桂月、笹川臨風、白河鯉洋、正岡芸陽の十六氏に、小杉未醒、小川芋銭、岡本月村の挿画が入った本である。「月見草のやうな女」のことは、津山中学赴任の様子を語った第「拾壹」章「鎖魂記」中に出る。右序文に関する明治四十五年四月十五日付の嶺雲宛書簡および大正改元後の九月十日の嶺雲葬儀への参列は、それぞれ「年譜」に記した。

大正九年(一九二〇) 庚申 四十八歳

八月 一日発行「中央文学」(第四年第八号)の「近文壇消息」欄に「胃病で臥床」と報じられた。

【典拠】「近文壇消息(八)」(「中央文学」四年八号、大正九年八月一日)

▲文士の動静

(…)

○泉鏡花氏 胃病で臥床。

【注記】

典拠の標題下に「文壇唯一の好資料。この記事を読めば一目の下に文壇の状況、文士の近況を知ることが出来る。本誌の誇るべき独特の記事として、毎号連載。」とあるごとく、諸会の開催、文士の動静、転居、戸籍調べ（冠婚葬祭）、新刊と近刊書目、雑誌消息、の各項にわたって、他誌の及ばぬ詳細な情報を提供している欄である。同じ春陽堂発行「新小説」のかつての時報欄の役割を果すものだが、以前よりもその情報の量は格段に増している。

大正十四年（一九二五） 乙丑 五十三歳

十一月二十八日付「時事新報」（朝刊四面）の「灰皿」欄に、最近の文芸趣味の変遷に関する鏡花の説が紹介された。

【典拠】「灰皿」（「時事新報」大正十四年十一月二十八日付・朝刊四面）＊□は欠字。

紅葉、露、袋、漱石、□「鏡」花□□「荷」風潤一郎寛と文壇の勢力も明治此の方目まぐるしい幾変遷を重ね来た◇従つて、読者の嗜好も「金色夜叉」から「蒲団」に「蒲団」から「猫」に「猫」から「刺青」それから「受難華」にと移り変りに忙はしかつたかはりに、どうやら文芸趣味も一般に普及して今では大抵の片田舎へ行つても久米とか芥川とかの名前がきこえるやうになつた◇処で問題は、それぢやどれだけ彼らの文芸に対する理解が進んで来たか——といふ事になるが、泉鏡花先生の説によると、その進歩の度合は凡そ次の如くだと云ふのである◇たとへていふと、以前はよく料理屋の女中などが、相手を作者だと知ると「私の今までの身上なんか、本当に小説よりも波瀾が多い位よ」てな感慨をふり廻して作者に自分の身上話を、小説の材料に

との親切から諄々として説き出したものだ◇ところが近頃は片田舎の温泉場の女中でもそんなことは云はない、てんづけ小説家と見ると、あべこべにネタになる前の小説家の受難話でもお先に失敬しやうといふ進歩の仕方だと云ふ。

【注記】

鏡花の説くところは、以前なら身上話を売り込んだ女中が、今は逆に小説家の受難話を失敬して売り出そうとするに至つた変化のありさまだが、かつて鏡花は、もと長野の芸妓小林栄子の自伝『流転のはじめ』（須原啓興社、大正五年十二月五日）に「序」を寄せており、自らも身上話の売り込みと出版に関与したこともあった（この経緯は、手塚昌行「鏡花の小林栄子著『流転のはじめ』序について」「日本古書通信」七三四・七三五号、平成二年九月十五日・十月十五日、に詳しい）。

昭和八年（一九三三） 癸酉 六十一歳

十月十八日、午後二時より、東京中央放送局（J O A K・第一放送）で家庭大学講座「こまかい話」と題しラジオ放送をした。同日付「都新聞」（朝刊六面）にその内容が詳しく紹介された。

【典拠1】「ラヂオ 本日のプログラム」（「都新聞」昭和八年十月十八日付・朝刊六面）

◇後〇、四〇 ニュース

◇後二、〇〇 家庭大学講座「こまかい話」泉鏡花

◇後三、四〇 氣象通報

【典拠2】「家庭大学講座 後二時 珍らしや泉鏡花老『こまかい話』の放送 振鷺亭の人情本から」（同右）＊文中の仕切りの罫線を「＊」に変える。

私は、江戸時代の振鷺亭の書きました人情本の一節を取り出しまして、その中に出て来る人物会話等を、異なつた時代に、他の作者の書きました同じ様な場面と比較して、其作風に現れた人物、会話等の細かい点に就いて、御話

して見たいと思ひます

*

先づ振鷺亭に就き、その伝記を少しく御話して見ませう、彼は徳川末期の読本、黄表紙の作者猪刈貞居、通称与兵衛と云ふ、家主の息子で、文学、絵画を好み殊に画は鳥居清長に就いて、相当画いたやうです、文学の方では山東京伝に私淑し、洒落本「自惚鏡」(寛政元年)が処女作で、爾来、洒落本、読本、黄表紙、合巻本と可なり多数を發表しました

*

その洒落本の中に、深川の題材の多いのは、彼の出入した遊里を示すものでありませう、特に「自惚鏡」は、相撲の取組の如く、遊女と客とを取り扱った構想で、当時としては斬新であつたので、京伝も之を模倣した位です(傾城買四十八手などは此の例)

*

私が今お話するのは「寒紅丑日待」上下二冊本の一部に就いてであります、之は歌川国直の挿画で、跋文には「文化丙子春塩浜別邸円窓下に題す」としてあります、此の本の扉に、表題の所以がしるしてあります

寒中丑の日の紅を、丑紅とて好とすると云ふ事、婦女の習ひにて、丑の日を用ゐること、如何なる故なるか知らず、又丑の日丑の刻に、丑待ちと云ふ事をすれば、将来の栄枯得失の分形、夢幻ともなく目に見ると云ふこと、妄語にやあらんなれど、ある老婆の物語りけるが、面白さに趣を加へて、作意ともなし云々

*

右の様な理由で、ある大名の奥勤めの女中が、精進潔斎して丑日待をするのですが、此の女中は、源氏の花の宴になぞらへたお花を初め、関屋、花紫、胡蝶の四人です、そしてお花は「面白いこと」関屋は「口惜しい事」花紫は「嬉しい事」胡蝶は「芽出度い事」を各々幻に見るのですが、此の中関屋の件

りが、大変面白く書かれてゐますので、此の処を比較して見ようと思ひます

*

之は江戸時代には、極有触れた話でせうが、手習ひ師匠の浪人に、一人の美人の娘があつたのですが、資産家の倅に見染られて、嫁に行く事になりました、ところが、此の資産家の番頭がその以前、此の娘を妾にしたいと、人を入れて頼んで断られたことがあり、此の娘が、嫁に来ると、番頭は誠に困るので、悪い下働きの婆をそのかして、娘が銭湯に入つたとき、一緒に婆を入り合はさせ、嫁入先の御新造の簪をひそかにぬいて、娘の着物の袖に入れ、濡れ衣を着せるのです

*

之は湯屋の釜番が見てゐたので後に娘が書置を残して、自害しようとする所にかけて、八方円満に治るのですが、それはどうでもよい事、銭湯に於いて悪婆が「簪がなくなつた」と騒ぎ立て、娘に云ひがゝりをつけるその言葉の遣り取りが、とても良く書けてゐるのです、之と同じ場面を取り入れた講談が、二つ許りあります

*

一つは仇討物、もう一つはお家騒動ものですが、之と細い所を比べて見る——つまり「丑日待」に「お前さん」と云つてゐる所を講談の方では「おまへ」と云つたり「姐さん」とある所を「あの娘」と云つたりしてゐるのです、斯う云ふ細かい所を比較して、人情本により、其の時代の文芸思潮や社会状態を考へて見たいと思ひます、題して「細かい話」として見ました

【注記】

放送の予報紹介は各紙ラジオ欄にあるが、なかでも典拠「都新聞」が最も詳しい。おそらく放送原稿の提供によると思われるが、談話に準ずる内容をもっている、記事の全文を引用した。

振鷺亭（？―文化十二年（一八一九）頃）は、鏡花の随筆「三十銭で買った太平記」（大正十五年十一月）中に「陰惨遙に南北を凌ぐ振鷺亭」云々と出ている。放送で取上げた「寒紅丑日待」（文化十三年）は、現時の研究（棚橋正博「振鷺亭年譜稿」『読本研究』第十輯下套、平成八年十一月三十日）においては人情本ではなく、洒落本に分類されている。

しかし、かつては洒落本と人情本との区別が現在ほど厳密ではなかったもので、「寒紅丑日待」は「帝国文庫」版『校訂人情本傑作集』下巻（博文館、明治二十八年八月二十五日）に収められているし、同書の改版である『人情本傑作集』（同、昭和三年五月十五日）の山崎麓（当時國學院大学教授）の解題には、本作が「未だ人情本の名称が起らず、作者は洒落本のつもりでありながら、内容外形共に人情本に成りきって居る作品である」と記されているほどで、鏡花もまた当時の認識にしたがって講話をしたのである。なお「丑日待」のことは「草迷宮」の三十一章にも出ている。

このラジオ放送と「都新聞」への情報提供は、当時東京中央放送局文芸課長（昭和六年八月以来）であり、かつ小説「町中」を同紙朝刊一面に連載中（八月三十一日―十月二十日）であった久保田万太郎の存在無しには考えられない。

鏡花のラジオ出演は、大正十四年七月二十七日、同十月三十日に続き三度目であるが、予報通りの一時間四十分を無事にこなしたとすれば、「どうもあの器械の前に立つと、声が吸ひとられて了ふよう（^{アッ}）でうまくゆかぬ」（「鏡花先生ラヂオを語る」『時事新報』大正十四年十二月十三日付・朝刊二面。『新編泉鏡花集』別巻一収録。引用は初出）と語ったところよりは、よほど放送に慣れてきたものといえよう。

昭和十年（一九三五） 乙亥 六十三歳

五月 八日から十四日まで、浅草公園内電気館で、原作を現代に直した勝

【典拠1】 広告（『読売新聞』昭和十年五月八日付・夕刊三面）

八日堂々封切
新喜劇 泉鏡花
原 泉鏡花
脚 泉鏡花
監 勝浦仙太郎
撮 中井朝一
配役
お藤（糸屋の娘） 伏見信子
船虫の紋次（ハマの与太者） 立松晃
柏木信夫（洋品店の息子） 田中春男
玉江（バアのマグム） 伏見直江
おつな（髪結・紋二の母） 野辺かほる
（：）
解説——「水上心中」を最後に蒲田から転じた勝浦仙太郎の新興第一回作で、サウンド版。同じく蒲田にゐた陶田密が脚色に当り、東宝から転じた伏見信子が第一回主演してゐる。

浦仙太郎監督の「稽古扇」（製作新興キネマ、脚色陶山密、撮影中井朝一、サウンド版全十巻、二二八八m）が封切られた（市内の上映館はほかに、新富座、新宿帝国館、麻布新興館、神楽坂牛込館）。出演は、お藤＝伏見信子、信夫＝田中春男、玉江＝伏見直江、紋次＝立松晃、おつな＝野辺かほるほか。

【典拠2】 「日本映画紹介」（キネマ旬報）

五三九号、昭和十年五月一日

稽古扇

新興・東京

原作 泉鏡花

脚色 陶山密

監督 勝浦仙太郎

撮影 中井朝一

配役

お藤（糸屋の娘） 伏見信子

船虫の紋次（ハマの与太者） 立松晃

柏木信夫（洋品店の息子） 田中春男

玉江（バアのマグム） 伏見直江

おつな（髪結・紋二の母） 野辺かほる

（：）

解説——「水上心中」を最後に蒲田から

転じた勝浦仙太郎の新興第一回作で、

サウンド版。同じく蒲田にゐた陶田密が

脚色に当り、東宝から転じた伏見信子が

第一回主演してゐる。

【典拠3】「新映画評判記 稽古扇 モダン化した鏡花の世界」〔都新聞〕昭和十年五月十一日付・七面

成る程、こりや泉鏡花の原作だったつけ……と、そう云ひたい程、これは鏡花老の描く世界からかけ離れて見えた、(…) 勝浦仙太郎の監督ぶりにしても、新興入社第一回といふので大緊張らしく、その効果は出てゐる下町物といふと兎角スピードが落ちてダレる、それがないだけでもいい

伏見信子のお藤は主役でもあり、一番商売人だ、これに比べると、田中春男の信夫も、立松晃の紋次も落ちる、伏見直江の玉枝は、バーの女だからいいが、年以上に老けて見える、他の共演者は失敬する、それより話題にしたいものがあるからで、それは先づサウンドで、相当豊富であり、選曲もいい、殊に踊りの場面なんか同時録音のような感じさへ出せたのは感心、撮影は、殊にロケーション等は天気を選んだらしくて上等だが、国産フィルム（マ）のせいとか、強い日ざしで細部の飛んだ件りがあつた、然し録音成績はよくなつた(勇)

【典拠4】岸松雄「稽古扇」〔キネマ旬報〕五四四号、昭和十年六月二十一日）＊「日本映画批評」欄。

稽古扇（サウンド版十巻）（二、二八八米）（…）

文芸作品の映画化を忠実にすべしといふ要求をするべくではないが、原作の精神ぐらひ汲んでやつても罰は当るまい。だが泉鏡花の原作といふ「稽古扇」のどこに原作者の精神があつたらうか。脚色者は、これを現代的に粉飾したのでといふかも知れない。しかし現代的に粉飾することは、この映画に於けるが如き非現代的な現代を露出することであるだらうか。凡そ現代に縁の遠い泉鏡花の原作をば、いかに現代にまでもつて来やうとしても、現代に接近するだけで完全に現代化されはしないのだ。して見れば始めから泉鏡花

原作などとうたはなければよかつたではないが「か」。

【注記】

この映画の解説として、佐藤忠男・登川直樹・丸尾定編『新興キネマ―戦前娯楽映画の王国』（フィルムアート社、平成五年三月三十日）所収「新興キネマ全作品記録」に「松竹浦田で池田義信の助監督から監督に昇進した勝浦仙太郎の新興キネマ入社第1作であり、東宝から転社した伏見信子の第1回主演作である現代風俗メロドラマ」と出ている。

新興キネマは、大正九年創立の帝国キネマ演芸株式会社が昭和六年に松竹資本の傘下へ入って出来た会社で、昭和十七年一月、戦時下の映画企業統制により、大都映画、日活映画とともに大日本映画製作株式会社（大映）に吸収されるまで十年余の活動があつた。

同社の作品では、溝口健二監督の「瀧の白糸」（昭和八年六月一日封切）が初期の傑作として映画史上に名を残すが、登川直樹が前掲書で、「新興キネマは娯楽映画の王国だった。大衆が安心して娯しめる映画を作り続けた。昭和六年から十年間あまり、日本映画がいちばん充実した時期に、ほとんど毎週二本立て封切りをやつてのけた活気あるプロダクションだった。」「当時の日本映画は、女性メロドラマを軸にした松竹、力強い時代劇の日活、途中から加わったモダン・センスの東宝が気負っていたが、それらに比べればグッとくだけて気楽に見られるところが、新興キネマの魅力だった。」と述べるように、「瀧の白糸」は社の路線においては、むしろ例外の芸術ものであり、この「稽古扇」のほうが松竹傍系映画会社の新興キネマらしい作品だといえる。「伏見信子がお藤でこの踊りの巧い糸屋の娘が、洋品店の息子（田中春男）と恋仲となるが、男には玉江がついて離れない。紋次はお藤への片思ひから、玉江を殺して、お藤の幸福を祈り捕はれてから脱走、入水して果てる。有名なあの毒虫を呑んで自殺する紋次の面影は勿論ない。」（映画と

演芸 新映画評 伏見姉妹共演 新興映画・泉鏡花原作「稽古扇」 「東京朝日新聞」昭和十年五月九日付・朝刊七面」という内容の映画化を、原作者鏡花がどの程度関知していたのか、現在までのところでは確認することができない。

「稽古扇」に関しては、前年四月花柳章太郎一座によるラジオドラマの放送があり、三か月後の七月に花柳、河合武雄、喜多村緑郎らによる明治座興行があった（いずれも「年譜」記載済み）。明治四十五年二月の明治座初演については「年譜」の記載を「補訂（十二）」で補足した。

昭和十三年（一九三八） 戊寅 六十六歳

八月 一日、区画整理による町名変更で、下六番町は六番町に改められ、地番も五番地一号となった。

【典拠1】「千代田区旧麹町各町行政区画変遷表」（千代田区役所編刊『千代田区史』

中巻、昭和三十五年三月三十一日）＊当該項目のみ摘記。

昭和四年二月 (一九二九) (区画整理町名 変更前)			区画整理に依る町名変更
町名	町名	変更年月日	
上六番町	(二) 四三番町	八、七、一	
中六番町	(二) 四四番町	一三、八、一	
下六番町	(二) 四六番町	一三、八、一	

【典拠2】 訃報（「東京朝日新聞」昭和十四年九月八日付・夕刊三面）

泉鏡花氏

文壇の耆宿泉鏡花氏（鏡太郎氏）は七日午後二時四十五分肺腫のため麹町区六番町五ノ一の自宅で死去した、享年六十七

【注記】

立項のきっかけは、典拠2にもあるように、主要紙の訃報記事の住所が「六番町」となっていたことに由る。ただし「都新聞」（九月八日付・朝刊三面）は「下六番町十三」、「報知新聞」（同日付・朝刊七面）は「下六番町五の一」で、それぞれ正確を欠く。

関東大震災後に順次進められた区画整理による町名変更は、逝去の一年あまり前に実施され、当地の現在の町名表示も「六番町」のままである。

典拠1「変遷表」に拠れば、明治二年に武家地を表貳番町とし、これを明治五年に下六番町として以来の三代六十六年におよぶ町名がこの時変更されたことになる。

この町名地番の変更については、久保田万太郎の「下六番町の先生」（『中央公論』五十四年十号、昭和十四年十月一日）の冒頭に、

麹町下六番町十一。

といったのはむかしのことで、いまは、六番町五の一。

五の一といっても五丁目一番地ではない、五番地の一号である。

が、永い間のなじみで、たゞさう六番町といったのでは気がすまない。だから、下六番町といまでもわたくしは「下」とつける。……従つて、五の一とも、五番地の一号とも書かないで、十一、あるひは、十一番地と純情に書く。郵便局でいやな顔をしたつてかまはない。

と出ている。

町名変更以降に出された鏡花の書簡は、現在までに確認されていないので、発信の住所をどのように表記していたのか判らない。

昭和十四年（一九三九） 己卯 六十七歳

三月 二日、泉すずは召集されて外地（中国）に在る佐藤観次郎宛に手紙を出した。佐藤は四月二日に江西省の虬津街^{きゅうしんがい}でこれを受取った。

【典拠】 佐藤観次郎『自動車部隊』（高山書院、昭和十五年九月二十日）*第三篇「内地からの手紙」の一節。

泉 すず

（泉鏡花氏夫人）

春寒の折から御元気でいらつしやいますよとおよろこび申上ます。毎々おたよりを頂きましてありがとう存じ上ます。御返事も申上ませんでまことに失礼ばかり、どうぞ御ゆるし下さいまし。お寒いなぞと申しまして申訳が御ざいませんが、東京もまたなか／＼お寒う御ざいます。

あなた様もどうぞ／＼御からだを御大切に遊ばして下さいまし。主人よりもくれぐれもよろしく申上居ります。今日三越よりおそまつな物を御送り致しました。何かお口にあいます物が御ざいますればうれしいことゝ存じ上ます。ほんとに御送り致したいと思ひます物はいつも新聞で拝見致します、皆様はほしがつていらつしやいます水道の水で御^{まづ}ごさいます。こればかりはわけのない事で何ともできませんので、思ふばかりでぢれつたくなります。かへす／＼もどうぞ御からだを御大切に。

三月二日 受信地 虬津街（昭和十四年四月二日）

【注記】

すずが主人に代って手紙を送った佐藤観次郎（明治三十四年八月十九日生、昭和四十五年三月三日歿、享年七十）は、愛知県出身、早稲田大学卒業後、昭和五年中央公論社に入り、九年から十一年まで「中央公論」編集長、十三年に石川達三の「生きてゐる兵隊」筆禍事件で休職、終戦まで三度、のべ五年間にわたる召集を受け、

戦後は日本社会党衆議院議員をつとめた人物である。

佐藤が「私が泉鏡花先生と親しくなったのは、水上、久保田両氏のお陰であった。私が泉先生に晩年に至る迄、非常に好意を持たれ、特別な交情を願ったのは、恐らく水上氏の陰ながらの推薦と思っている。」（水上瀧太郎の自由のすがた）『編集長の回想』東京書房、昭和三十三年十二月二十四日）と述べるように、鏡花との辱知を得たのは水上瀧太郎への親炙に由るのである。

『自動車部隊』（装丁安井曾太郎）は、昭和十三年三月に応召、石井（栄次中佐）部隊の本部付主計少尉として従軍した記録で、召集を解かれたのは十五年五月であった。書中「内地からの手紙」は、泉すずを含めて、全六十五氏の書簡を到着順に収録した章で、志賀直哉を最初に、職業柄、丹羽文雄、石川達三、矢田津世子、井伏鱒二、芹澤光治良、菊池寛、尾崎士郎、宮本百合子、大仏次郎らの作家のものを多く含み、最後に部隊長石井中佐の来簡を置く。佐藤がすずからの手紙を受取った「虬津街」は現在の江西省九江市永修県虬津鎮である。

本項、佐藤の著書については、片山宏行氏「菊池寛の手紙―佐藤観次郎宛書簡をめぐり―」（『文芸もず』十号、平成二十一年八月十五日）により教えられた。

昭和十四年（一九三九） 己卯 六十七歳

九月 六日、久保田万太郎は明治座十月興行「三枚続」の件につき番町に電話をかけ、松竹の関係者が訪問したかを訊ねた。電話にはすず夫人が出た。

【典拠】 久保田万太郎「露寒の記」（『日本評論』十四年十二号、昭和十四年十二月一日。のち『八重一重』小山書店、昭和十四年十二月二十五日、に収録）*引用は初出。

十月の明治座の『三枚続』上演は、先生のお亡りになったのをみかけてのことではなく、先生のお亡りになるまへ、すでに、喜多村の愛吉、水谷八重

子のお夏でやることにきまつてゐたのであります。げんに、お亡りになる三日まへ、わたくしは、松竹の高橋歳雄氏から演出の交渉をうけました。わたくしは、嘗ての、『日本橋』『湯島詣』『白鷺』のときとおなじく、喜んで承知しました。と同時に、今度こそ脚色者の巖谷三一君に、事前に先生をお訪ねし、まづ以て先生の御意見をうかがひ、場割その他、すべて先生のお指図に従ふやうにと条件をつけたのであります。(…)

『えゝ、早速、巖谷さんに行つてもらひませう。』

高橋さんはすぐ承知してくれました。

一日隔いて……六日の日……わたくしは、先生のところへ念のため、松竹からだれかうかがつたらうかと電話をかけました。と、奥さんが出ておいでになつて、まだどなたもおみえになりません、さういふ御返事でした。それではどうにもなりません。すなはち話を転じて、

『先生しかし、いかゞですか、その後?……』

手紙ならば、とりも直さず「末ながら」の、きはめて御懇意づくに、さういつたお見舞の言葉をいつたものであります。

【注記】

「三枚続」は鏡花逝去の翌月十月一日から二十五日まで明治座三番目狂言として上場された。巖谷三一脚色、久保田万太郎監督(演出)、小村雪岱装置、鑄木清方・小村雪岱意匠考証により、続編「式部小路」までを含んだ内容の六幕十一場を、お夏Ⅱ水谷八重子、愛吉Ⅱ喜多村緑郎、お賤Ⅱ河合武雄、山の井光起Ⅱ伊井友三郎、加茂川亘Ⅱ小堀誠、遠山金之助Ⅱ藤村秀夫ほかが演じた(以上「明治座十月興行筋書」「演劇新派」七巻十号、昭和十四年十月五日、を参照)。

伊原青々園の劇評(二つに割れた新派「明治座」)「都新聞」昭和十四年十月六日付・朝刊七面)には「喜多村が立役の職人でタンカを切るのが呼び物だし、水谷が主役

のお夏で絵草子店へ軍鶏を抱いて出て来る所や、氷川坂で籠を負うて現れた所は、口絵の抜け出たやうな美しさを感じる、その絵草子店で軍鶏が夜鳴きする件に原作者の匂ひはあるが、鏡花氏の作を芝居で見せると、あの名文の高い香味が薄らいで、現実には遠い筋の無理だけが残るやうに思はれて成らぬ」とある。

「三枚続」単独の上演はこれが初めてではないかと考えられるが、「補訂(十三)」明治四十三年七月の項において、「湯島詣」の改作「みじか夜」(小島孤舟脚色)と「三枚続」を綯交ぜにした「草枕」(京都明治座)と、これを改題した「夏木立」(京都岩神座)がそれぞれ上演されたことを確認している。

昭和十六年(一九四一) 辛巳 歿後二年

八月 この月、柳田泉は勝本清一郎の案内で、中央公論社版『尾崎紅葉全集』編輯に関わつて、紅葉の鏡花宛書翰借用のため、番町に泉を訪ねた。

【典拠】 柳田泉「鏡花伝きゝがき」(『国文学解釈と鑑賞』八巻四号、昭和十八年四月一日)

明けたので一昨年になるが、昭和十六年の八月、勝本清一郎氏の案内で泉鏡花未亡人を二回ほどお訪ねしたことがあつた。それは、当面の用向としては、鏡花の師尾崎紅葉の全集編纂について、紅葉から鏡花あてゝ来てゐる書翰類を借りることであつたが、そのついでに、わたしは、鏡花についての雑談といったやうなものを未亡人から聞くことが出来たので、聞くがまゝに、その席で大要を記して帰つた。

【注記】

中央公論社版『尾崎紅葉全集』は、勝本清一郎・塩田良平・本間久雄・柳田泉を主な編纂委員とし、全十巻予定であつたが、五巻、六巻、九巻の三巻のみ刊行

されて中絶した。「書翰」は内容見本では第九巻に収録予定のところ、「十千万堂日録」等を収めた第九巻（昭和十七年九月十五日）には収録されず、同書巻末の「総目次」では随筆、俳句とともに第八巻に変更されたものの、未刊に終わった。その後、岩波書店版『紅葉全集』第十二巻（平成七年九月二十七日）に、書簡四六二通が収録された。

勝本が柳田の案内役に立ったのは、「三田文学」の同人として水上瀧太郎に親炙していたからである。

昭和十七年（一九四二） 壬午 歿後三年

八月 十一日、午前十時より湯島天神境内で「泉鏡花筆塚」の起工式があり、泉かずと寺木定芳夫妻が列した。

九月 七日、四周忌のこの日午後四時より、筆塚の竣工式があり、泉かずはじめ、岡田八千代、久保田万太郎、里見弴、笹川臨風、三宅正太郎、室積徂春、寺木定芳ら「七日会」の人々、親戚知己二十余名が参列した。

【典拠1】 一門下生「^{思ひ}番町の先生」（『鏡花全集月報』二十五号、昭和十七年十月）

* 第二巻附録。刊行日記載なし。

鏡花筆塚の建立が漸く関係諸官署の許可を得た。谷中の石六事高橋六太郎君が一切の石工事を担任する事になった。（…）八月上旬、泉鏡花筆塚と墨痕淋漓たるものが出来上った。直に石面彫刻にかゝり、それも出来上ったので、八月十一日午前十時湯島天神公園に於て其の起工式が厳肅に挙行された。（…）起工式にはわざと誰方にも御通知はださず、奥様と一門下生夫妻だけが参列した。然し湯島公園の午前十時といふので、通りがかりの人などが相当大勢立止つて賑やかに見物はしてゐた。都新聞が、いち早く聞きつけて前日の夕刊にも書いたし、当日も写真部と社会部記者が見えて、十二日の朝刊には其

の記事と奥様が御参列のうしろ姿が掲載されてゐた。（…）竣工式即ち除幕式といったものは此の九月七日先生の四周忌に同処で挙行された。

【典拠2】 「けふ泉鏡花の筆塚起工式」（『都新聞』昭和十七年八月十二日付・夕刊二面）

* 発行は十一日夕。

泉鏡花逝いて四年——故人の門下生寺木定芳、久保田万太郎氏等の奔走で鏡花の子供時代から縁りの深い本郷湯島天神境内の静かな緑陰の池畔に筆塚を建てることになり

十一日午前十時これが起工式を未亡人しづ子（^{つぐこ}）（六）さん始め寺木氏等の手で行つた、竣工式は来る九月七日の命日に挙行

【典拠3】 「泉鏡花の筆塚 きふの竣工式」（『都新聞』昭和十七年九月八日付・朝刊七面）

既報、文豪泉鏡花の四周忌に当る七日、鏡花が生前愛用の筆墨数百本を埋めた筆塚の竣工式が「婦系図」や「湯島詣で」で故人に由縁の地湯島天神の境内で行はれた

式は午後四時しづ子未亡人を始め里見弴、笹川臨風、三宅正太郎、岡田八千代、室積徂春、寺木定芳氏ら七日会の人々や親戚知己廿余名が参列して営まれたがこの筆塚の碑の正面には「泉鏡花筆塚」裏面には「鏡花生前愛用せるところの筆墨をあつめ石を建てゝ之を表す」と何れも笹川臨風氏の達筆を彫つたものである、なほ三田慶大図書館に設置計画中の「鏡花室」は藤原工大の谷口吉郎教授が構築を引受け準備を進めてゐる（写真は筆塚としづ子未亡人）

【注記】

典拠1には「都新聞が、いち早く聞きつけて前日の夕刊にも書いたし」とあるが、国立国会図書館蔵の同紙マイクロフィルムでは、八月十一日付夕刊には該当

する記事を見出せなかった。また「十二日の朝刊」とあるのは、典拠2のとおり同日付夕刊の誤りである。

典拠2に、寺木とともに建立に当って奔走したという久保田万太郎は、典拠3には名前が無いが、寺木の評伝・鈴木祥井著『寺木だあ！』（財団法人口腔保健協会、平成二十一年五月二十日）に収録の写真（二五九頁）には、久保田が子息の耕一とともに写っているのが確認されるので、本文に記した。「七日会」は鏡花の命日にちなむ近親者の会。

起工式に参列した寺木夫人貞子（旧姓牛田^{うしまる}。明治二十九年五月二十八日生、昭和五十七年十月十八日歿、享年八十七）はもと新劇の女優衣川孔雀。大正二年三月、近代劇協会第二回公演の「ファウスト」のグレトヘン役で初舞台に立ち、訳者森鷗外の高い評価を得て活躍したが、大正六年に引退。近代劇協会の上山草人の愛人となった彼女が彼の手を逃れて寺木の許に奔る経緯は、草人の著『煉獄』（新潮社、大正七年十月二十日）に詳しいが、生田長江、谷崎潤一郎の序文をもつ本書は彼の立場を正当化しようとする小説で、事実を述べたものかどうか判らない。

昭和二十年（一九四五） 乙酉 歿後六年

五月 二十五日から二十六日にかけての空襲により、六番町五番一号（モト下六番町十一番地）の鏡花旧宅が焼失した。夫人は前年八月、熱海に疎開していた。

【典拠1】大佛次郎『大佛次郎 敗戦日記』（草思社、平成七年四月三日）*〔 〕内は引用者補。

〔昭和二十年〕五月二十八日（…）

○里見氏の東京の家焼けたり。三男が見に行く。新橋で降り赤坂見附へ出るに西側ずっと家なし。首相官邸も焼けたる由。（…）

五月二十九日（…）

○里見さん本と原稿用紙をこのくらい焼いたと手つきで示す。鏡花旧宅も焼失、未亡人は熱海、しかし机蔵書など慶応図書館に引取られおり。ここが焼けたことで落胆せしことならんと。

【典拠2】里見弴の遠藤喜久宛書簡（里見弴『月明の徑 弴・良ころの雁書』文藝春秋、昭和五十六年一月十五日）*〔 〕内は引用者補。

〔昭和二十年〕五月三十一日

鎌倉市小町より、上田市諏訪形へ 書留

今日はお前が東京を去つてから丁度ひと月目の五月晦日だ。（…）ラデオその他で既に覚悟してゐることゝは思ふが、二十五日夜十一時頃、番町宅は遂に灰になったさうだ。同日の夕方までゐて荷など提げて帰つたことは前便で言つてやつたが、それから数時間後に、もうあの永年住み馴れた家がなくなつてゐたとは。ひよつとしたらとは思つても、はつきりさうとも思ひきれなかつたのだが……。…二十六日は不通、二十七日はこつちも少々あぶなくなつて来たので、藤原の山上の家に手車一台分の荷運びをする先約があつたので、静夫を代理に上京させたところ、番町界限見渡す限りの焼野原。

【典拠3】泉名月「鏡花の星」（『本の本』二巻一号、昭和五十一年一月一日）

鏡花の番町の家の格子戸を入れて、障子を開けると、すぐ部屋の左側に、積み木を重ね合わせたような幾何模様の、緑色のカーテンがかかった、天井まである本棚があつた。（…）

鏡花の書斎は東に面した二階の八畳であつた。（…）私の母は、二階の押し入れにあつた本は、おもに、鏡花の初版の単行本であつたという。この番町の家も戦争のため、昭和十九年八月に疎開をしなければならなくなつたが、鏡花の世帯道具の、車に積まれた荷物と一緒に、『源氏物語』と題が書いてあ

る桐箱が、首を傾げ、黒い墨の文字の眼をうるませながら、車に揺られて走り去っていったのを覚えている。

【注記】

典拠1に、焼跡を見に行ったとある「三男」は、典拠2に出る里見淳の子息山内「静夫」であるが、正しくは三男ではなく四男（末子。大正十四年六月十三日生れ）にあたる。静夫は昭和二十二年慶応大学卒業後、松竹に入社、二十三年五月には久保田万太郎の媒酌で結婚し、父と親しかった小津安二郎監督の「早春」以下「東京暮色」「彼岸花」「秋刀魚の味」等のプロデューサーをつとめた。

典拠2の前便（五月二十六日付）には「昨日夕方五時頃、静夫と重い荷をかついだりさげたりして帰宅すると、手紙が来てゐた。」とあるので、里見は二十五日夕方まで番町の家（当時の地番は麴町区六番町三番五号）に居て鎌倉の自宅（住所は小町一四六番地）に引揚げ、二十七日、静夫に様子を見に行かせた、その状況を二十九日に大佛（住所は雪の下四二八番地）へ報告したのである。

遠藤喜久（昭和二十七年十一月六日歿、享年五十七）は、もと赤坂の芸妓菊龍、通称を良と言い、里見の愛人として大正十二年の関東大震災以降、麴町下六番町の有島家近く、いわゆる「番町の家」に住み、鏡花夫妻にも可愛がられていたが、二十年五月一日、里見に連れられ女中の初とともに信州上田の諏訪形へ疎開していた（里見は九日に帰京）。

鏡花の文では「九九九会小記」（昭和三年八月発表）中、会へ赴くの近所の里見を誘うくだり「……其処で、道順だから、やすい円タクでお誘ひ申さうかと、もし、電話（註。お隣の借りる）を掛けると六丁目里見氏宅で、はあ、とうけて、婀娜な返事が——幹事で支度がありますから、時間を早く、一足お先へ——と言ふのであつた。」と出る「婀娜な返事」の主が喜久である。

『東京大空襲・戦災誌』第二巻（東京空襲を記録する会、昭和四十八年三月十日）に

よれば、五月二十四日午前一時三十六分から三時五十分までと、翌二十五日午後十時二十二分から二十六日午前一時頃までの二回、B二九爆撃機による焼夷弾の投下があった。この時の空襲の様子は、六番町の隣町、五番町十二番地（モト土手三番町三十七番地）の自宅を焼かれた内田百閒『東京焼盡』（大日本雄弁会講談社、昭和三十年四月二十日）の第三十八章に縷述するところである。

泉すずの熱海への疎開については、おそらく同地に別荘を持っていた寺木定芳か、疎開して家のあった堀尾成章の幹旋かと思われるが、情報が少なく、嗣子名月の文に拠るはなかった。今後さらに傍証を求めたい。

なお、慶応義塾図書館に寄贈されていた鏡花の旧蔵書も時を同じくしてこの空襲の火災により、草双紙を除く八三六冊が烏有に帰し、遺品と自筆原稿は難を免れ、現存している。

『大佛次郎 敗戦日記』の記述については、片山宏行氏よりご教示を得た。

昭和二十五年（一九五〇） 庚寅 歿後十一年

一月 二十日（午前一時四十分）、泉すずが喘息のため熱海仲田の自宅で逝去した（享年七十。戒名真如院妙楽日鈴大姉）。翌日に通夜、二十二日の午前九時に出棺、喪主は泉名月がつとめた。通夜、葬儀には里見淳、谷崎潤一郎夫妻、寺木定芳夫妻、嶋中雄作未亡人千枝、同長女眉子らが参列し、告別式は二十七日午後一時より牛込矢来町円福寺で行われた。

【典拠1】 訃報（『東京新聞』昭和二十五年一月二十二日付・四面）

泉すず氏（泉鏡花未亡人）廿日午前一時四十分熱海市仲田の自宅でゼン息のため死去、六十八歳告別式は廿七日一時牛込矢来町円福寺

【典拠2】 里見淳「泣虫」（『改造文芸』二巻四号、昭和二十五年四月一日）

葬儀屋の手で、おばあちゃんの小さな亡なきがらが棺に納められた。足もとの

うで一尺以上も余った隙間へ、前もって選り分けて置いた手周りの品々を、遺族や親しい人々がそつと入れてあげた。喘息の発作を引き起こしがちなので、大好物の莧は我慢して貰ふことにしてあつたが、喪主なる養女の母親・おさわさんに、時をり、——一服いけないかしら。さぞおしいだらうなア、と、子供のねだりごとの調子で甘へるので、三度に一度は、自身服めもしないのに、近くでふか／＼ふかしてあげると、細い腕を伸して、立ち迷ふ煙を鼻先へ搔き寄せながら、——仕様がなから、こんなことで辛抱して置きませうね、と、寂しい笑顔を綻ばせたといふ話を、私は聞いてゐた。紫檀の提戔盆は止むを得ないにしても、せめてその前面の溝に横たへてある長煙管だけでも、と思ひ、そつちに近くゐた誰かに把つて貰つて、さて、どこに、と迷つたが、結局、合掌させられてゐる手と胸との間に挟んであげた。と、なんの前触もなく、いきなりぐつと込みあげるのを喰ひしる拍子に、咽の奥がへんな鳴り方をした。自分よりもつと親しい女の人たちでも、さほど泣き顔は見せないのに、こゝで声など立てては、と、急いで襖隣の茶の間へ逃げだし、下六番町の旧居で、いつも先生と差向ひに手をかざしてゐられた長火鉢の前に坐り込んで了つた。(…)

先生とは、亡泉鏡花先生のことだが、同棲約四十年の後、良人におくるゝこと十年四箇月、今茲一月二十日の夜半に、すゞさんは、満六十八歳で永眠された。(…)

晩年の先生とは、筋向ひに住んでゐたので、自然、——今度はおつけ晴れてさう呼べる、奥さんともお懇意くなり、お得意の悪態に、しやア／＼と言葉仇をも勤めた。昭和十四年の晩夏、先生が逝去されて後、めつきり老けられたのを、外面のざらついた劬りの気持で、私が「おばあちゃん」と呼んだのに対して、負嫌ひの性分から、まだ五十そこ／＼だった私を捉へて、さも憎々しげに、「おぢいちゃん」と竹篋返しを喰はせた。以来十年に亘

る「おぢいちゃん」「おばあちゃん」のつきあひだった。(…)

先生の旧い弟子で、一時は同居を許されてゐた寺木定芳君の息子も、おばあちゃんの御最期の一人だったが、亡つたとも知らずに、恰度そこへ来合せてゐた。先生の実弟・斜汀事・豊春さんの遺児で、伯父の跡目を継いでゐる名月さんの従兄妹にあたる大学生、それに、名月さん自身は言ふまでもないとして、老人の葬送には珍しいほど若い人たちが多かつた。(…)

翌朝九時、遺骸は、普通の自動車から腰掛を取り去つただけの霊棺車で、火葬場へ運ばれようとしてゐた。前夜も通夜に来てくれた谷崎君夫妻や、島中君の未亡人、眉子さんなどのほかに、近所の見送りてが、往來のあちこちにかたまつて、それも可なり的人数だった。(…)

やがて、遺族や寺木君夫妻たちを乗せたのを先に、二台の自動車が、仰山な音をたてて動きだした。

【注記】

すず未亡人が熱海に疎開したのは、前項(昭和二十年五月二十五日)にも記したように、昭和十九年八月のことで、翌年空襲で番町の旧宅が焼けてからは東京に戻らぬまま逝去したのである。熱海での生活の一端は、この時喪主をつとめた養女泉名月(昭和八年九月二十一日生、平成二十年七月六日歿、享年七十八)の「梔子」(『鬼ゆり』學藝書林、昭和五十年九月五日)に小説化されている。里見文にもあるように、名月の生母岡本さわ(豊春斜汀の未亡人)とともに三人の生活であつた。

前項に引用した里見弾『月明の徑・弾・良こころの雁書』にも、しばしば熱海の「おばあちゃん」の消息が伝えられている。

嶋中雄作(中央公論社社長、明治二十年二月二日生、昭和二十四年一月十七日歿、享年六十二)の未亡人と長女の参列は、彼の晩年熱海の別邸で病を養い、ここに逝去した縁ですずとの交際があつたためであり、谷崎が夫妻で列したのは、昭和二十三

年一月以来、市内上天神町山王ホテル内の別荘（六十一号）に居を移していたからである。なお、谷崎は、まず逝去直後の二月、同じ仲田町に家を購入（八〇五番地。嶋中雄作別邸の隣）、「細雪」完成後にちなみ、ここを「雪後庵」と名づけた。さらに二十九年四月には伊豆山鳴沢の別荘に引移り、この家も「雪後庵」としたので、仲田の家を「前の雪後庵」、鳴沢の家を「後の雪後庵」と言いならわしている。（野村尚吾『伝記 谷崎潤一郎』六興出版、昭和四十七年五月二十五日）。

「付記」

本文中にお名前を記した方々のご教示のほか、資料の調査に関しては、国立国会図書館、日本近代文学館、神奈川近代文学館、青山学院大学図書館、本学図書館近代文庫のお世話になった。併せて深謝申し上げる。

（よしだ まさし 日本語日本文学科）